

楽曲解説

9/15 (金) 第895回サントリー定期シリーズ

解説=野本由紀夫

9/15

本日の演奏会について

東京フィルにとって、マーラーの交響曲第2番『復活』は運命的な作品である。このオーケストラの節目・節目で演奏してきたからである。合併まえの旧・東京フィルの最後の定期演奏会(2001年1月26日、指揮 沼尻竜典)の演目がこの曲だったし、同年4月1日に新星日本交響楽団と合併して「新生」東京フィルとなった最初の定期演奏会(6月15日・16日)も、マエストロ・チョン・ミンフンの指揮するこの交響曲でスタートした。

また、5年目の2006年も、当時31歳のダニエル・ハーディングによってシーズンが開始され(4月6日)、10年目を迎えた2010年も常任指揮者に就任したばかりのダン・エッティンガーによる定期演奏会(4月4日)であった。その年は、マーラーの「生誕150年」でもあった。

マエストロ・チョン・ミンフンとは実に16年ぶりの『復活』である。本日の演奏会は、さらなる時代へと進む歴史の一夜になるだろう。

マーラー(1860-1911)

交響曲第2番 ハ短調 『復活』(国際マーラー協会全集版)

マーラーが完成した「最初」の交響曲。この第2番を書き上げた1894年の時点では、第1番はまだ5楽章の「交響詩」だった。声楽を取り入れた点でも、第2番『復活』はマーラーにとって大きな転機となった作品といえる。

●作曲の経緯

交響曲第2番は、「生と死」がテーマである。しかし、この構想が交響曲として形をなすまでには、紆余曲折があった。

もともと第1楽章は、28歳のとき、交響詩『葬礼』として完成された(1888年1月末ごろ作曲を開始、9月10日にブラハで浄書が完成)。当初、これのみ単独で出版しようとしたが、失敗。

1891年3月にハンブルク市立劇場の首席指揮者になったマーラーは、かねてより尊敬していたハンブルク在住の名指揮者、ハンス・フォン・ビューロー(1830-1894)に、『葬礼』をピアノで弾いて、聴いてもらう。しかし、反応は否定的。まだブラームス(1833-1897)が生きていたころの話だから、マーラーの音楽はビューローにとって、けた外れに革新的すぎたのだろう。こうして、『葬礼』をめぐる作曲は、しばらくストップしてしまう。

1893年、マーラーはもう一度、交響曲としてこの曲に取り組み直し、他の楽章の作曲も進める。ところが、合唱を導入しようと考えていた終楽章で行き詰まってしまう。ふさわしい歌詞

